

# 乖離都市と水辺



石川誠大  
建築設計計画研究室

## 御茶ノ水

1日の駅利用者数は10万人であり日本大学、明治大学、など多くの大学があり、日本最大の学生の街として知られる。

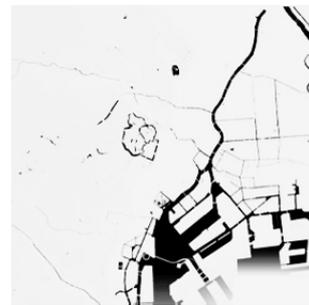
駅自体はホームと神田川が隣接しており、御茶ノ水橋から駅を眺める景観は「御茶ノ水らしさ」感じられ、尊敬すべきものである。しかし、バリアフリーやオープンスペースが少ないなどの問題もある。

## 東京

東京は、大地震や空襲、オリンピックや高度経済成長によって東京で加速された「変化する都市」というコンセプトは、いまヨーロッパの「不変の都市」に対抗する、新たな都市モデルとして世界から注目されるまでに成長した。経済成長の過程の中で様々なものを破壊し、構築してきた東京は、本来は密接な関係の存在や事象、概念を強引に引き離し多くの乖離を生み出した。東京とは乖離都市なのである。



江戸水網図 1856年



東京水網図 2003年

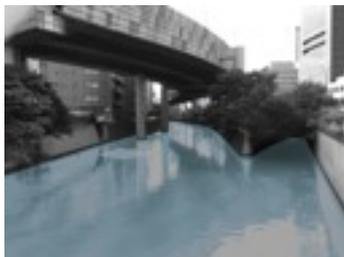


## 江戸・東京の水辺空間

かつての江戸の中心部は約2割を水路が占め、河川や運河が縦横にはしり、舟運が物流を支えた水辺の大都市であった。

しかし、戦後の経済成長の中で、交通の利便性や治水を重視したため、水路の一部は埋め立てられ、舟運も衰退していった。その後、1964年の東京オリンピックの際に急ピッチで交通機関などのインフラが整備され、東京の水辺は光を失った。また、急速に拡大した経済活動や人口増加のために水質は悪化し、かつて人々に親しまれた水辺空間は人々が顔を背ける姿と変わっていった。

その後、2020年の東京オリンピックに向けて交通整備を実施する案があがっており、今後の東京の水辺空間は再び光を浴びようとしている。



## Concept

水辺空間が見直されてきたいま、水辺空間を建築する。

生活の身近にある「水」。その大部分は生活排水・飲料水に使用され、人間が生きるうえでの必需品とされている。水には「音」があり「流れ」がある。そんな水音や水流によって切り取られた空間は、音によって騒音が遮られる。

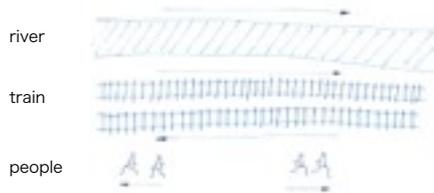
駅、電車、道路、高層ビルといった都市のキーエレメントを排除した空間が形成され、これからの東京でしかない水辺空間を提案する。



## Program

1. 川のベクトルは永年的に変化せず、川辺に建設された御茶ノ水駅は必然的に川と同じベクトルで線路を敷いた。それに伴って駅利用者のベクトルも川、電車と同じものになってしまい、互いに正面を向き合わない関係になった。

川、電車、人の3本のベクトルに水平、垂直にグリッドを引き3本のベクトルを交わせ、全体を構成する。



2. 本来、同レベルにあったプラットフォームを2つに分け、レベル差を与えた。景観=舞台、駅=観客席をコンセプトに断面計画をした。

また、敷地南側に在る建物を取り除き、歩行者と川・景観の関係も濃くした。



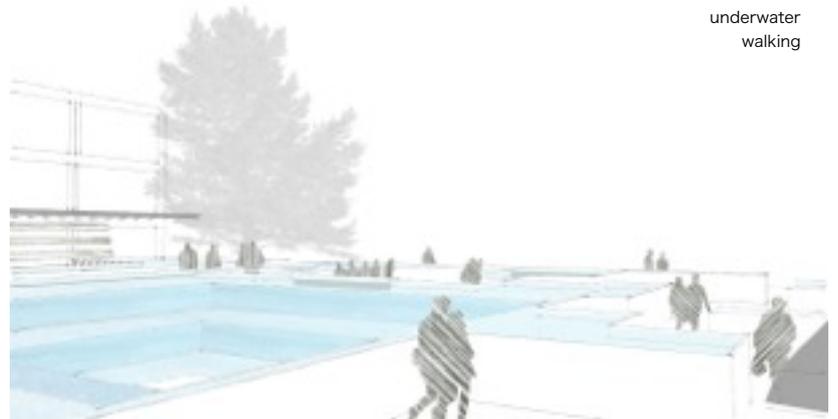
## Design

「水中歩行」をコンセプトに水を近くに感じられるように水面を1000mm上げた。

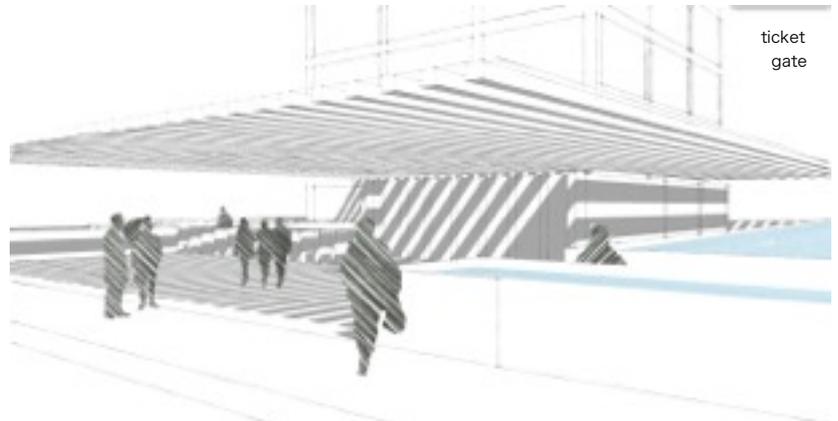
また、歩行者が互いに水中にいる錯覚になるように設計した。



underwater walking



ticket gate



retarding water

